



## いざ！丸リンピックへ！

副校長 足立 憲昭

残暑も落ち着き、秋空が気持ちよく澄み渡る好季節となりました。日頃より本校の教育活動へのご理解ご協力に感謝いたします。

現在、子どもたちは「丸リンピック」に向けた準備を進めています。先日の懇談会でも各担任より説明させていただきましたが、今年度の「丸リンピック」は、子どもたちが8秒間走と徒競走を選択して参加できるようにしました。選択制の大きなねらいは、考えて活動を選択することで、自分のめあてをもち、それが達成できるように努力する力を養うことを目指しています。子どもたちが選択するときには、必ず自分の考えが出てきます。これは、本校の2年生以上の子どもたちが、週末に自主学習に取り組むことにもつながっています。ただ「言われたことをやる」のではなく、「自分で考えて選択して取り組む」ことのほうが、子どもたちのやる気は喚起され学習効果は高くなります。考えることは楽しいのです。

本校の目標である「自分づくりに関する力」の伸長を目指し、その柱のひとつとして今年度体育科を中心に授業研究を行っています。考えるという活動は体育科でも最重要視していますが、稀に子どもたちとの会話のなかで、「友達がやっているから」「ただ何となく」という言葉を使って、考えることを停止してしまう姿に出会うことがあります。問題にあたったときに、自分なりに考えて解決の見通しをもち、問題解決に向けて粘り強く取り組んでいく姿勢を、体育科や「丸リンピック」で育成していきたいと思えます。もちろん子どもですから、その考えが安易であったり、考えが浅かったりすることがありますが、それは大きな問題ではありません。低学年は低学年なりに、高学年は高学年なりに自分で考えて見通しをもつことが大切なのです。自分で考えて解決に取り組むからこそ、うまくいかないときは、他者のせいにするのではなく修正していくという態度が子どもなりに身に付いていきます。さらに、自分で考えて行動することには、その子どもなりの責任も伴ってきます。

その一方、考えるには子どもたちに十分な思考する時間が必要です。つい大人は、子どもの思考や活動の先を見越して「〇〇をやった？」「〇〇できていないの？」と聞いてしまいがちですが、この言葉はとりわけ反抗期の子どもたちのやる気を著しく挫きます。「やろうと思っていたのに。やる気をなくした。」となるのです（大人である私たちも子どもであった頃、このやり取りに身に覚えがありませんか）。「丸リンピック」まで短い期間となりますが、子どもたちを支援しながら意図的に見守るというスタンスも大切にしていきたいと考えています。見守ることは、とても時間がかかります。子どもですから、課題解決とは程遠い試行錯誤をしたり、できていたことができなくなっていたりと、大人が思っているほど順調に伸びることはそうありません。私たち教師は先手をうって指示を出しがちですが、そこはグッと我慢して、子どもたちの考える時間を大切に、子どもたちとともに「丸リンピック」を作り上げていきたいと思えます。

今回の「丸リンピック」では、文部科学省が推進する子どもたち一人ひとりの個別最適な学び・学習の個別化や考える過程を重視するとともに、協働的に学ぶ力をつけていくことを軸に準備を進めています。いわゆる「運動会」ではなく、日常の体育科の学習の成果を生かす場である「丸リンピック」と位置付けています。子どもたちが考えたスローガンである「みんなで全力 協力！ 笑顔の丸リンピック 2023」のもと、自分のめあてに向かって頑張る子どもたちの姿を応援してください。



丸リンピック実行委員の子どもたちが作成したスローガンの掲示です。子どもたちの想いがこもっています。